

## 承前

吉村は、大きく息を吸って襲撃者たちを見る。再び銃弾の雨が襲ったが、さつきほどの勢いはない。何人かは既に戦線を離脱し、逃げ始めているようだ。

吉村は、炎の息を吐いた。

もちろんそれは、口から出たときは微量の炭酸ガスが交じった空気に過ぎなかったし、速度もそよ風ほどだった。しかし、想像上のドラゴンが噴射する火焰かえんがこれに加わると、たちまち、摂氏数千度の衝撃波に変わり、武装した男たちに襲いかかる。

絶叫が上がった。男たちは吹き飛ばされ、無残に焼け爛たれて絶命した。

吉村は、ゆっくりと歩き出した。

サビーナの死で最悪だった精神状態は、回復に向かっていた。快感物質のシャワーが、頭の中で驟雨しゅううのように降り注いでいる。

「さあ、どうしようか？」

吉村は、独りごちた。まるで、ゲームのようだと思う。どうやって東京を灰燼かいじんに帰し、都民を塵殺ちんころするかというのがミッシヨンである。どちらの方角に進むか、どういう攻撃を加えるかが、腕の見せ所だ。HPは有限だから、無駄は極力省かなければ、壊しきれず、殺し損なって、終わってしまう。

サビーナの仇かたきを討つためには、最低でも、裏切り者のノナとラスボスの手塚不律てづかふりつだけは斃たおさな

ければならないが、そこに辿り着くまでにダメージを受けないことも大切だった。

日本橋口から出ると、襲撃者たちが乗ってきた黒いワゴン車が逃げ去るところだった。ロータリーを塞いでいる邪魔な車にぶつかりながら、強引に永代通りに出ようとしている。

吉村は、神の鉄槌を下す。ワゴン車は、玄能を振り下ろされたカブトムシよりも脆く、砕け散って炎上した。

銃撃戦が始まったときから周囲はパニックに陥っていたが、信号を無視して逃げようとする車同士が衝突し、ますますひどい渋滞を引き起こしている。

吉村は、再び炎の息を吹き付けた。

自動車は、陽炎のように筋状の流れが見える高温の強風によって浮き上がり、相次いで発火、爆発した。すると今度は、本物の炎が風に煽られて次の車にぶつかっては、次々と誘爆させていく。

一気に、快感のボルテージが上がった。吉村は天を仰ぎ、両手で髪を後ろに撫でつけた。

ああ、これだ、これだ。これだった……。

この病的なまでの爽快感。多幸症めいた喜び。甘美なる全能感。

空は、ゆつくりとその色を変えつつあった。東京の空に特有の漂白したような青から、薄桃色へ。さらに、夕暮れのような深みのある赤へと。

自分の姿を見下ろすと、影は血のような深紅色だった。街は一足先に、血のイメージに彩られていた。

さあ、生け贄はどこだ。

一人も逃がさないぞ。

吉村は、にんまりして歩き出す。どうして、この快感を忘れていたのだろう。この世のどんな快楽も吹き飛ばしてしまうような、この究極の悦楽を。

……そうだ。

あのととき、自分を現実世界に引き戻したのは、サビーナだった。

そんなことをしなければよかったのに。

そうすれば、サビーナ自身も死なずにすんだ。

だが……。

サビーナが与えてくれた心の平穏は、大量殺人の圧倒的な快楽に勝るとも劣らないものだったような気がする。

もう、あの気分は二度と味わえないのだ。

限りなく昂揚ちやうやうしつつあった気分が、ほんの少しだけ萎しぼんだような気がする。

サビーナは、もういない。

馬鹿！ だから、仇を討つんだろうが！

頭の中で、獣の声が吠え猛たげる。

殺せ！ 殺せ！ 殺し尽くせ！ 最後は、ノナと手塚不律だ！ まだまだ先は長いぞ。立ち止

まってる暇なんか、ねえ！

しかし、吉村は、いつの間にかその場に佇たえずんでいる自分に気がついた。

サビーナ……。

俺を、破滅から救ってくれたサビーナ。

心に安らぎを与えてくれたサビーナ。

涙があふれそうになる。

ふと、自分でも、もう一度、あそこへ行けそうな気がした。

大音量のロックに身を浸しているような強烈な快感ではなく、心静かにピアノソナタに聴き入っているような、優しく穏やかな世界へ。

世界の色が、ゆっくりと元に戻っていった。深紅色からピンク色に。さらに、いつもの自然な色彩へと。

どうするんだったかな。

吉村は、目を閉じて思い出す。

心の扉を開け、光の差す方へ歩いて行くんだ。

ああ……。

神の恩寵おんちようのような暖かさを感じる。

もう少しだ。もう少しで、また、あそこへ行ける。

しかし、最後の扉は、なかなか開かなかった。

どうしたんだ。どうすればいいんだ。吉村は、焦りを感じていた。グズグズしていたら、また、あの快感の奔流に呑み込まれてしまう。

あときは、サビーナがいたから。

サビーナが、導いてくれた。

サビーナが、最後の心の扉を開いてくれた……。

そうだ、と吉村は気づく。

サビーナは、俺の心に直接タッチして、動かしてくれた。だったら、俺が自分で同じことをやればいい。

自分の心の世界をイメージする。真つ暗な螺旋階段を上っていき、最後の扉の前で立ち尽くしている自分自身を。

この扉を開けばいい。

俺には、神の力がある。現実世界でも動かせないものはないのだから、精神世界なら、遥かに容易なはずだ。

そう思ったが、扉は開かない。

アプローチの仕方が違うのかなと、吉村は気がついた。

実体のないものを動かすのは念動力ではない。純粹な想像力だ。だが、他人の心を操るには、やはり念動力が必要になる。念で念を動かすには、どうすればいいのか。

ふつうなら、ただ途方に暮れるしかなかったはずだ。だが、吉村は、サビーナによって心を開いてもらったときの感触を覚えていた。

……共感だ。

心を心に寄り添わせる。そして、自分のイメージをゆつくりと相手に転写するのだ。

それを、自分の心に対して行うには……。

吉村は、瞑想をするように、ゆつくりと呼吸した。

あの安らぎを思い出す。

扉の向こうには、あの世界がある。光溢れる、桃源郷とうげんきょうが。

すると、ゆつくりと扉が開きかけた。

隙間すきまからは、眩まぼゆいばかりの光が漏れ出してきた。

ああ……やったよ。

サビーナ。俺、一人でできた。

心の平穏を取り戻して、恐ろしい衝動を抑えることができたんだ。

すべて、君のおかげだ。本当に、ありがとう。

もう、破壊と殺戮さつりくはたくさんだ。俺は、これから、君がしてくれたことに応えるため、一人でも多くの人を救う。そのために、まず……。

そのとき、パンという乾いた音が響いた。

吉村は、目を開ける。扉が、パタンと音を立てて閉まるのがわかった。

ゆつくりと振り返る。すると、三十メートルほど離れた路上にいる男の姿が目に入った。片膝ひざをついた射撃姿勢で、拳銃を構えている。

肩に鋭い痛みを感じた。触ってみると、服が裂け、血が流れている。どうやら、銃弾がかすったらしい。プロなら必中の距離だろうが、とっさに無意識の念動力で弾き、急所を外したらしかった。

視界が、ゆつくりと怒りの赤に染め上げられていく。

誰だ、こいつは。襲撃者の一味が、残っていたのか。それとも、通りすがりの私服警官だろう

か。

どちらにしても、これまでだ。男の手からもぎ離された拳銃が、宙高く飛び上がった。男は、呆然<sup>ぼうぜん</sup>として、その行方を見送っている。

ふう……。

吉村は、深い溜め息をつき、にんまりとした。

俺は、いったい何をしていたんだ。この期に及んで。サビーナを殺されて、自分もまた殺されたか、かけたというのに。

阿片のように心を麻痺させ、でくの坊に変えてしまう妙な世界など、願い下げだ。

俺の心を熱くするのは、戦いであり、命のやり取りであり、街を染める大量の血なのだ。

さあ、大変。

吉村は、にこにこしながら、男を見た。

どうしよう？ 困った困った。撃つたはいいが、外しちゃった。怖いよ怖いよ。殺されちゃうよ。嫌だよ嫌だよ。死ぬのは嫌だよ。

まあ、いい。こいつ一人にかかざらっている時間はない。俺の血を吸った蚊のように、さっさと叩き潰して、血煙に変えてしまおう。

吉村は、そう思って男を宙に持ち上げたが、ふと、別のアイデアが閃<sup>ひらめ</sup>いた。

さっき、俺は、自分で自分の心に干渉するのに成功した。

だったら、今度は、こいつの心をいじってやるのも面白いかも。

吊り上げられた男は、恐怖に喘<sup>あえ</sup>ぎながらも、喉<sup>のど</sup>を嚔<sup>か</sup>らしながら叫んでいた。

「殺せ！ さっさと殺せよ！ このサイコ野郎！」

「サイコ野郎っていうのは、俺のことか？」

吉村が訊くと、男は、ますますいきり立った。

「この人殺し！ 何人殺したら、気が済むんだ？ さあ、どうした？ チキン野郎が！ さっさとやれよ！」

サイコなチキン野郎とは、罵倒にしても矛盾している。どっちかにしてくれ。

吉村は、男の心に深く共感しようとした。

「あ？ おまえ……何をしてる？」

異状を感じたらしく、男は、目を見開いた。

吉村は、男の心を探った。まるで、泥水の中でナマズを捕えようとしているようだった。触れたかと思うと、ヌルヌルと滑って逃れてしまう。

だが、やがて、尻尾を捕まえた。

ようし、もう逃がさないぞ。

男は、恐怖に身を震わせていた。何をされているのかはわからないだろうが、本能的に恐怖を感じているらしい。

吉村は、男の心の扉を開き、中に入ってしまった。

そこには、恐怖に身を強張らせている男がいた。実際の外見より若く、弱々しく見えた。それが、男の本当の自己イメージらしい。弱い自分を隠すために身体を鍛え、マッチョな外見を作り上げたのだろう。



「やあ。俺と一緒に、東京を大掃除しないか？」

吉村は、笑顔で呼びかける。

男は、ブルブルとかぶりを振った。

「そんなこと言うなよ。楽しいぞ……人を殺すのは」

吉村は、男に近づいていき、両手で顔に触れた。男の顔は粘土のようにぐにぐにやぐにやになり、吉村の指は根元まで埋まった。

「う……ああああ……止める！」

現実世界で宙吊りになっている男は、悲鳴を上げていた。

「もう、自分の弱さに悩まなくていい。俺も、ちょっと前まではそうだった。でも、今は、何も怖くない」

吉村は、男の顔を粘土のように捏ね回した。できるだけ男前にしてやろうと思ったが、なかなかうまく作れない。

しかたがないので、昆虫のような大きな複眼をこしらえてやった。鼻は単なる穴でいい。口は耳まで裂けて、大きな牙きはが覗のぞいている。

「これなら、いいんじゃない？　もう、誰にも怯えないですむから。むしろ、みんなが、君に怯えるだろうね」

吉村は一瞬で現実世界に戻り、男の姿を眺めた。男は、白目を剥むいて泡を吹きながら、身体からだを痙攣けいれんさせている。

まずい。このまま死ぬんじゃないかと思ったが、男は急に正氣に戻った。虚ろな目で、吉村を

見下ろしている。

吉村は男を地面に下ろした。男は、少しよろめいたが、何とか踏み止まった。据わった目は、ほとんど瞬かない。

「じゃあ、大事な得物を返してあげるよ」

上空から拳銃が降りてきて、男の手の中に収まったが、男は何の反応も見せない。

「それで、思う存分、人を撃ちまくったらいい。ただし、的は俺以外だからね。今度俺に向かって発砲したら、叩き潰すよ？　じゃあ、行っていい」

男は、吉村には目もくれず、スタスタと歩き始めた。

五十メートルほど行ったところで、向こうから、制服警官が走ってくるのが見えた。

男は、拳銃を挙げて狙いを付けると、一発で制服警官を撃ち倒した。

これはいい。どんどん友達のを抜げていけば、本当に、都内から人を一掃できるかも。吸血鬼とかゾンビみたいなのに、あいつら自身が別の人間を殺し屋に変えられれば、たちまち收拾が付かなくなるだろうが、それは無理だろう。

だったら、俺が、一人でも多く、あいつの同類を捨てるしかないだろう。

吉村の背から、蝙蝠の翼が広がった。

吉村の身体は、ふわりと浮き上がり、街を空から見下ろす。

体力を使って自分で殺すよりも、たくさんの分身を作って殺させた方がいい。楽だし、真の敵——手塚不律とノナ——をおびき出すことができるかもしれない。

空から人影を見つけると、見えない手でひつつかみ、心をこじ開けていった。

さっきの経験が生きて、それほど時間をかけなくてもゾンビに改造することができた。五人目くらいからは、ほとんど流れ作業で増やしていく。地上に戻したゾンビの大半は、拳銃のような強力な武器は持っていないので、なかなか大量虐殺というところまではいかない。中には、ゾンビ同士で殺し合うやつらもいて、思わず舌打ちした。

しかし、混乱は徐々に広がっていった。

外見はふつうの人間だから、なかなか見分けが付かないし、自分の家族や友人だったりすると、不意を突かれて殺されてしまうのも無理はないだろう。

吉村は、ぶるっと身を震わせた。

拳銃の弾がかすった跡が、ズキズキと痛む。出血も、まだ完全には止まっていないようだった。吉村は地面に降りて、怪我の治療をすることにした。自分の身体に対して直接念動力を及ぼすのは怖かったが、今やっておかないと、後で困ることになる。

裂けた皮膚がゆっくりと融合していく。毛細血管までは繋ぎ合わせられなかったので、たちまち皮下出血して紫色の痣を作ったが、そのうち止まるだろう。

キヤタピラーの音が聞こえてきた。一台や二台ではなかった。自衛隊が出動したらしい。ターゲットは、もちろん俺だ。

吉村は、戦いに備えて、悪魔の姿に変身した。

(つづく)